

自分の身を置く「林」をしっかり認識する

前回(シリーズ第11回)相場を観測する際には「林」をしっかりとりえなくてはならないと解説した。今回は、実際に「林」をどのようにみればよいのかを過去の実例を元に説明する。

右の図1、2、3は2000年4月からの下落相場を、日経平均株価と2つの業種別指標で示している。日経平均株価は2000年4月までは上昇トレンドにあったことは罫線図より確認できる。ITバブルでの上昇だ。

その後の動きは30種の入替えのため、罫線図はゆがんでいても考えられるが、それを考慮しても上昇トレンドがくずれたことは、5月の終わり頃には感じ取れるであろう。

大きな流れが上昇から下落に変化するためには、強力な下落の「林」(テーマ)が市場を支配しはじめなければならない。きちんと「林」を観測している投資家ならば、下落の中心に「通信」がいたことはすぐにわかるであろう。ITバブルの崩壊で「通信」は日経平均株価がまだ上昇中だった2月から下落に転じ、5月にはピーク時の3分の1近くの株価水準になっていたのだ。まさに、大きな流れ(大勢)を下落に転じさせ、前半、流れの中心にあったのである。

一方、ITバブルで同じように上昇してきた「電気機器」はどうであろうか。日経平均株価や「通信」が大きく下落している中、高値で保ち合い相場を形成していたことは罫線図をみれば一目瞭然だ。

もし、NEC等「電気機器」に属する銘柄を「買い」で保有していたら安心してはならない。「電気機器」と同様にIT相場を牽引してきた「通信」は下落の流れの中心にあるのだ。7、8月の時点で、「電気機器」はその流れに巻き込まれていないが、足元は非常に危険な状態であることはわかるであろう。

8月の高値を最後に「電気機器」も下落に

図1

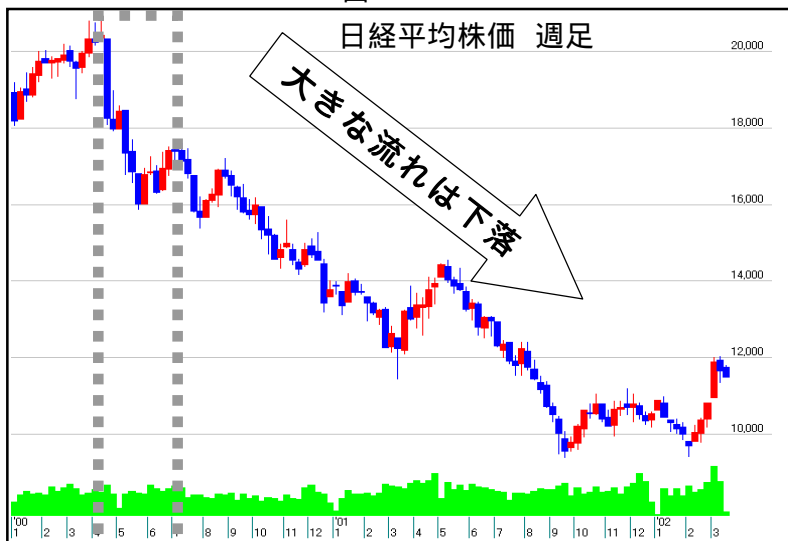


図2

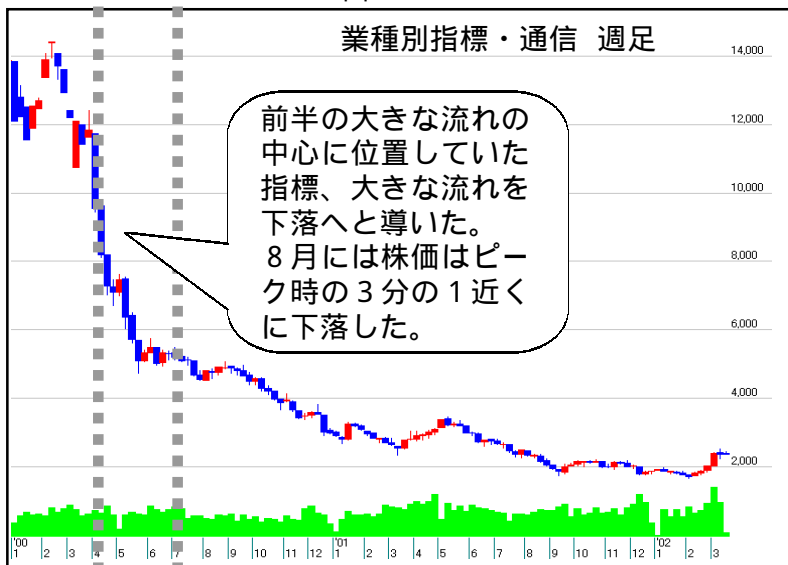
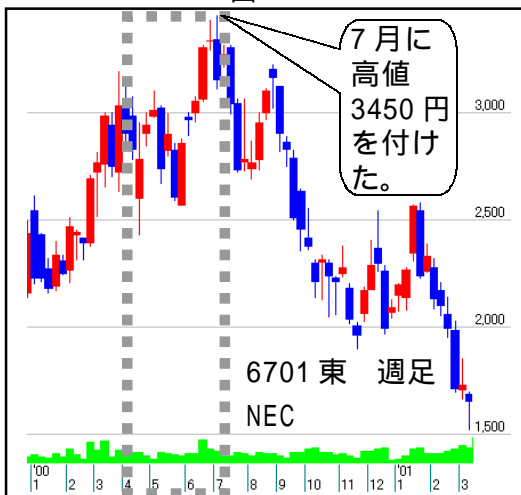


図3



図4



転じた。もしNEC(図4)株を保有していたのなら、高値を付けたのは日経平均株価が崩れだした3ヶ月後の7月であり、きちんと「森をみて林をみて木をみる」を実践していれば、利食うチャンスは何度でもあったのである。「柴田罫線」は現状をきちんと分析するものである。現在、自分の保有する銘柄が属する「林」(テーマ)が、大きな流れ(大勢)の中の、どのような位置にいるのか(大きな流れが下落ならば、中心で下落を牽引しているのか、それとも流れに巻き込まれていないのか)をしっかりと観測しなくてはならないのだ。「柴田罫線」をはじめたばかりの投資家は、個々の銘柄に現れる「買い法則」や「売り法則」だけに目がいきましがちになる。しかし、「法則」の適用は一番最後といってよいだろう。それ以前に観測しなくてはならないことがあることをしっかりと認識して勉強していただきたい。

学ぶ ポイント

「森」(大勢)

日経平均株価、TOPIX、全銘柄単純平均株価などの指標の罫線を見る。
 鉤足BS指数5日平均(「柴田罫線」株式週報)を見る。(下記参照)
 清光経済研究所ホームページで無料公開している鉤足「買い転換」数、「売り転換」数を週ごとに記録し、その数の変化から読み取る。
 新聞、ニュースから市場の強弱を読み取る(参考程度にとどめる)。

「林」(業種・テーマ)

業種別指標を見る。
 主要な個別銘柄の上昇率、下落率をチェックして、その日、その週、その月にどのような銘柄群が上昇したのか、それとも下落したのかをみる。
 例えば日経平均株価が底値をつけてからの上昇率をチェックすることにより、どのような銘柄群が相場を牽引してきたのかがわかる。
 清光経済研究所のネットメンバーサービス「柴田秋豊の罫線」、ソフトウェア「柴田罫線PRO」または「柴田罫線」株式週報を利用して、その日、その週、その月、あるいはある期間において、鉤足法則でどのような銘柄群が買い転換してきたのか、売り転換してきたのかをみる。
 新聞、ニュースからテーマを読み取る。(「学ぶシリーズ」第11回参照)
 新聞、雑誌、インターネット等で「テーマ」についての特集があれば、その銘柄を控えておく。例えば「介護」、「ナノテク」、「狂牛病」、「ブロードバンド」、「不良債権の多い会社」、「国際優良企業」など。それらの罫線を比較することにより、テーマの動向や大きさを確認する。

「木」(個別銘柄)

「林」の中で個別銘柄を比較検討し、その「林」が若い上昇相場にあるならばその中心に位置する銘柄を狙い、かなり上昇しているならば出遅れ銘柄を狙う。
 押し目をつけた後の「二の膳相場」を狙う際には、原則として1段目に大きく上昇したものの、押し目の浅いものを狙う。
 例えば「地震」「戦争」など、全く罫線に織り込まれていない大きな情報(ニュース)、材料が出た場合は、手じまいすることを考える。ただし、その影響がどれほどかは自分で判断し、柴田罫線の原則から外れることを自覚する。

「柴田罫線」株式週報と鉤足BS指数5日平均

清光経済研究所が毎週金曜日に発行している「柴田罫線」株式週報は、相場の大きな流れから個別銘柄までをわかりやすく解説している。その中で、日本株全体の動きを知るために週報編集部が独自に算出している指数が「鉤足BS指数5日平均」だ。相場の状況が「買い」か「売り」かを、新規売買転換数を数値化することにより把握できる。

	方 式	解 説
計算式	$\frac{\text{新規買い銘柄数} - \text{新規売り銘柄数}}{\text{新規買い銘柄数} + \text{新規売り銘柄数}} \times 100$	レシオは買い銘柄数と売り銘柄数が同数のときは「0」となり、買いが多ければプラス、売りが多ければマイナスとなる
市場	東 (東・店頭は研究中)	レシオを市場別に把握する
紹介方式	レシオ5日平均	「5日平均」を毎日算出する
レシオの見方	レシオの転換点と変化を重視	レシオが「マイナスからプラス」「プラスからマイナス」に転じた転換点と、プラス幅・マイナス幅の変化を重視する